

【書評】大竹晋『大乘起信論成立問題の研究』

—『大乘起信論』は漢文仏教文献からのパッチワーク—

石井 公成

近代仏教学における数多い論争のうち、論じられた期間が最も長く、また最も多様な説が出されたのは、『大乘起信論』の成立をめぐる論争だろう。中国の場合は、この論争を通じて近代仏教学が形成されている。^{〔1〕}

東アジア仏教の基軸の一つとなった『大乘起信論』（以下、『起信論』と略す）は、馬鳴菩薩の作、真諦三蔵（四九九〜五六九）の訳とされている。しかし、隋の訳経目録である法経の『衆経目録』（五九四年）では、「人は真諦訳と言っているが、真諦の訳経録を調べるとこの論は無い。そのため、疑惑の部に入れておく」と記している。また、三論宗の教理を集成した吉蔵（五四九〜六二二）の兄弟弟子である百済の慧均は、『大乘四論玄義』において、北地の諸論師によれば馬鳴の作ではなく、昔の地論師が作って馬鳴の作だと称したと述べ、唐代の新羅の華嚴学者と思われる珍高も、『探玄記第三私記』において、『起信論』は偽経に基づいているから偽論だと説いて

いる。

以後もこの問題は時に論じられてきたが、成立をめぐる論争が活発になったのは、望月信亨が一九〇二年に「起信論の作者に就いて」と題する論文を発表し、『起信論』の作者と成立年代に対して疑問を呈してからだ。以後、真作説、北地ないし南地での偽作説、来朝したインドル人選述説など、実に様々な説が提出され、論争がなされてきた。

この論争史の中で、重要なくさびを打ち込んだのが、竹村牧男の『大乘起信論読釈』（一九八五年）だった。インド唯識説の研究者であって華嚴教学など中国仏教の知識もあつた竹村は、『起信論』が用いている語を精査し、南地の真諦の訳語より、北地の菩提流支や勒那摩提などの訳語と一致する場合は圧倒的に多いことを指摘したのだ。この点は、その前からある程度は説かれていたが、竹村はこの面の研究を大幅に進展させ、状況を一変させ

た。このため、真諦訳出説を支持して実証的な研究を重ねてきた柏木弘雄なども、後になると真諦の訳場に北地から来た僧侶が参加して訳語に影響を与えたのだと説くようになった。

しかし、竹村を初めとするこれまでの研究成果を考慮せず、またインド仏教の教理に不案内なまま『起信論』インド成立説を説く人たちが、近年になってまた現れるようになった。そうした状況の中で登場したのが、つくば大学の学部と大学院でその竹村の指導を受けて研究を始めた大竹晋の『大乘起信論成立問題の研究——『大乘起信論』は漢文文献からのパッチワーク——』だ。副題が示すように、中国成立説に立つこの著作は、千四百年以上にわたる長い論争を終わらせた画期的な研究と言つてよい。議論の細かい点については、今後修正されたり補足されたりするだろうが、中国北地の中国人の作だとする大竹の結論を論駁することは不可能だろう。

本書の構成は、以下の通り。

目次

まえがき

序論

一 はじめに

二 研究史の概観

三 本研究の構成

四 おわりに

第一部 資料篇

第一章 敦煌写本系『大乘起信論』

第二章 北朝現在漢文仏教文献対照『大乘起信論』

第二部 研究篇

第一章 『大乘起信論』の素材

一 はじめに

二 元魏漢訳に先行する諸訳

三 元魏漢訳に先行する偽経

四 元魏漢訳

五 元魏菩提流支著作および講義録

六 おわりに

第二章 『大乘起信論』における北朝仏教説

一 はじめに

二 五蘊を色心と見なす説

三 心を無明と見なす説

四 双運道における止観の対象を別々と見なす説

五 大乘の語義を三大と見なす説

六 おわりに

第三章 『大乘起信論』における奇説

一 はじめに

二 あらゆる諸法を真如と見なす説

- 三 意を五意と見なす説
- 四 熏習を熏と見なす説
- 五 前世の業障が今世に残っていると見なす説
- 六 阿惟越致を信から退かなくなることと見なす説
- 七 正定聚を信から退かなくなる者と見なす説
- 八 おわりに

第四章 『大乘起信論』の成立と流伝

- 一 はじめに
- 二 北朝における成立と馬鳴への仮託
- 三 南朝における流伝と真諦への仮託
- 四 おわりに

結論

- 一 はじめに
- 二 中国仏教史における『大乘起信論』
- 三 通仏教史における『大乘起信論』
- 四 おわりに

註
索引

Table of Contents

Outline

「序論」では、『起信論』は「インド大乘仏教の手頃な

入門書のように扱われてきた」と述べ、その成立問題に取り組んだ人の多くは「梵文や蔵訳について知識を持たないまま、漢文仏教文献にもとづいて憶測を述べたにすぎない」と手厳しい言葉を述べている（四頁）。本書の研究は、大竹が自ら述べているように、「漢文大蔵経の電子化」と「敦煌出土北朝文献の翻刻出版^②」という最近の二大成果に基づいているが、大竹がこの成果を存分に生かすことができたのは、インドと中国の如来蔵説・唯識説に対する該博な知識と、梵文文献およびチベット語訳文の精密な読解力による。大竹はこれまでに著書としては『唯識説を中心とした初期華嚴教学の研究―智儼・義湘から法蔵へ』、『元魏漢訳ヴァスバンドゥ積経論群の研究』、訳注書では新国訳大蔵経シリーズの『十地経論Ⅰ・Ⅱ』、『大宝積経論』、『能断金剛般若波羅蜜多経論釈 他』、『法華経論・無量寿経論 他』、『金剛仙論』（共著）その他を公刊し、関連論文も数多く発表してきた。つまり、『起信論』の背景となる漢訳の諸経論に対して精細な注をつけ、梵文やチベット語の対応箇所を指摘し、内容に関する研究もしてきたのだ。また、大竹自身、「地論宗断片集成」（金剛大学仏教文化研究所編『地論宗の形成』、国書刊行会、二〇一七年）が示すように、地論宗文献の佚文を精力的に収集して公開する作業もやっている。

そうした積み重ねが、今回の本に生かされているのだ。

『起信論』の成立問題に関して、大竹ほど適任な研究者はいないだろう。「ある文献がインド選述であるか中国選述であるかを決定しようとする人々が、梵文や藏訳について知識を持たないというのは、学問的な誠実さを疑われても仕方がないのではあるまいか」（四頁）とまで大竹は述べているが、これは、梵文・藏訳・漢文資料を活用して『起信論』について論じた高崎直道、柏木弘雄、竹村牧男などのように、素晴らしい研究水準を示してきた日本の仏教学界が急速に衰退しつつあることに対して、大竹が強い危機感を抱いていることによる。右の厳しい言葉は、若い世代の研究者に対する激励の言葉として受け止めるべきだろう。

第一部資料編の第一章では、複数の敦煌写本を用いて本文を校訂し、唐代に流通していた古形を復元している。大竹のこの復元テキストは今後の『起信論』研究の基盤となるに違いない。大正大藏経だけで研究できた時代はとくに終わっており、近年ではテキストの変遷によって『梵網経』の受容の仕方の変化を明らかにした船山徹の研究なども出ているが、いまだにこの問題に注意を払わない内外の研究者が多いのは遺憾だ。

第二章の「北朝現在漢文仏教文献対照『大乘起信論』」では、高崎直道の研究を参照しつつ『起信論』の語法や用語の特徴について簡略に説明したうえで、校訂された

『起信論』本文とその現代語訳を示している。そして、『起信論』の校訂テキストを上段に、また現存する北朝の漢文仏教文献のうちの対応部分を下段に配して対照させ、『起信論』が北朝の漢訳経論・講義録・注釈など様々な漢文仏教文献を素材としていること、少なくともそれと並行していることを明らかにし、経論などの梵文テキストやチベット語訳が存在する部分についてはそれも示して現代語訳を付している。この対照作業は実に徹底したものであつて、きわめて有益だ。『起信論』作者が基づいた典拠、あるいは類似した説が知られるうえ、本覚・始覚の部分のように、対応する梵文テキストやチベット語訳が示されていない箇所については、『起信論』作者の創作である可能性が高いことが分かる。『起信論』の特質が見えてくるうえ、今後さらなる研究をしていく際、これほど便利で貴重なデータはないだろう。

第二部は研究編のうち、第一章『大乘起信論』の素材』では、同論の素材となつている北朝のさまざまな漢文仏教文献が検討される。その中には偽経、偽論だけでなく、来朝したインド人三蔵の講義録も含まれている。これまで、『起信論』が偽経である『仁王般若波羅蜜経』の説を用いていることは指摘されていたが、本書ではそうした調査を徹底しておこなつているのだ。特に、『起信論』との類似部分が指摘されていた『金剛仙論』につい

では、大竹自身が詳細な研究をし、菩提流支の講義録であることを明らかにしているため、その『金剛仙論』に基づく部分が多いことは、北朝人撰述説の有力な材料となっている。

この部分には多くの発見が含まれている。そのうち、特に重要な指摘の一つは、『起信論』が「修多羅 (sūtra 經)」の説として引いている文言のほとんどについて典拠を明らかにし、しかも、『瑜伽論』「本地分中菩薩地」の異訳である『菩薩地持經』の主張が「修多羅」の説として引用されていることを明らかにしたことだろう。大竹が述べているように、論である「菩薩地」の内容を「經」の引用という形で扱うのは、「菩薩地」を「菩薩地持經」という「經」の形で受容していた中国においてしかありえない。これは、これまで不明なものが多かった『起信論』の「修多羅」の引用を解明した大竹ならではの指摘だ。

この第一章において書評子が衝撃を受けたのは、『涅槃經』に基づく部分が一カ所しか指摘されていないことだった。これほど詳細に典拠を精査しておりながら、『起信論』と『涅槃經』の一致箇所がこしかなないというのは、北朝における『涅槃經』の流行を考えると信じがたいことであり、『起信論』作者の独自の立場を良く示すものだ。これは、『起信論』が「仏性」という語を用いて

いないことも関係していよう。つまり、『起信論』作者は如来蔵を説く『勝鬘經』や『楞伽經』や『宝性論』その他の漢訳經論や菩提流支の講義録である『金剛仙論』などを尊重する一方で、「一切衆生悉有仏性」を強調することによって南北朝仏教の基調となった漢訳『涅槃經』を重視していなかった、あるいは違いを強調しようとしていたことになる。このことは、『起信論』の作者を推定するうえで、このうえなく重要な前提となる。このように、本書は、それ自体すぐれた研究成果であると同時に、今後の研究にとつてきわめて有益な素材を提供している。

なお、本章では、般若流支の訳経との共通箇所を示す際、菩提流支訳が直訳調であるのに対して、同時期の毘目智仙訳と般若流支訳は一貫して四字句であつて、ともに曇林が筆受をつとめていることに着目している。そして、曇林の「毘耶婆闍經翻訳之記」にも『起信論』と似た言い回しや「撰化衆生」のように『起信論』とこの「毘耶婆闍經翻訳之記」の用例が最も早い語句が含まれていることを指摘する。書評子はかつて、『起信論』には直訳調で読みにくい部分と、後半のように四字句を連ねている部分があり、直訳調の部分で四字句が続く箇所は不適切な比喩や中国的解釈を思わせる内容であることを指摘したが⁴、大竹はこの指摘に触れ、『起信論』で四字句が続く部分については曇林の訳文の影響がある可能性を示

唆している。

書評子はまた、曇林が序を書いて編纂したとされる禅宗最初の文献、『二入四行論』のうちに『起信論』を類似する言い回しがあることを指摘したことがあるが、大竹はさらにこれを取り上げ、曇林が『起信論』選述に関与したとまでは考えていないものの、『起信論』選述が曇林に比較的近いところで行われたことについては疑いえないと論じている。大竹は、「菩提達摩『二入四行』をめぐって」（『駒沢大学禅研究所年報』第二十五号、二〇一三年十二月）において、『二入四行論』と北地の訳経との共通性を見いだしているため、今回の『起信論』研究は初期禅宗の研究にとっても役立つことになる。

第二章においては、近年、翻刻がなされて研究が進んだ敦煌出土の北朝仏教文献を活用し、『起信論』に見える北朝仏教の説を指摘して整理している。本章では、『起信論』に見える北朝仏教の説がいかに中国風な解釈をしているかを具体的に示し、これによってインド人撰述説を否定して北地中国人撰述説を補強している。南朝仏教学の説との類似も注意されており、『起信論』が大乘を体大・相大・用大の三大によって説明するのは、南朝の莊嚴寺僧旻や開善寺智蔵や招提寺慧琰などが摩訶般若の説明に用いていた体大・相大の概念が、仏の三身を体と用とに分類する『金剛仙論』を経て北地で展開した体・

相・用の仏身論に基づいているという。大竹は触れていないが、莊嚴寺僧旻や開善寺智蔵などの説が北地にまで伝わっていたことは、彼らの注釈が敦煌やその周辺から得られた写本中に含まれていることが示す通りだ。

第三章においては、『起信論』に散見されるインド仏教に対する誤解について検討している。こうした検討は、大竹の独壇場だ。この面の研究はこれまでほとんど指摘されてこなかったが、これは東アジア諸国においては『起信論』こそがインド仏教の概論とみなされてきたため、『起信論』の説とインド仏教の教理とのズレが注意されにくかったためだと、大竹は述べている。興味深い指摘が続く中で特に注目されるのは、インドにおいては悟りから退かなくなつたことを意味する阿惟越致 (avavartikata など) のことを、『起信論』は信から退かなくなることだと誤解しているという指摘だ。大竹は、これは「かつて諸仏のもとで善根を植えたことがある衆生が決定的に退かないものである信を得るようになる」と説く『金剛仙論』の主張に似ているという。『起信論』のこの解釈は、元暁を初めとする東アジア諸国の浄土信仰に大きな影響を与えているため、大竹のこの指摘の意味は大きい。

第四章においては、同論が北朝でいつ成立し、いつ馬鳴に仮託され、いつ南朝に流伝し、いつ真諦に仮託され

たのかを、現在利用できる限りの資料によって解明している。大竹は、『起信論』には地論宗南道派や北道派の教理は見られないとし、菩提流支が中国に來朝した時期やそれ以前の北朝仏教の教理、また菩提流支の訳経や講義録に見える要素と共通する点が目立つとしている。さらに、訳経の状況などを考慮し、成立時期については、五四三年から五四九年頃の成立と見る。

そして馬鳴への仮託については、日本の七寺一切経、興聖寺一切経、松尾社一切経などから発見され、古形を保っていると考えられている写本系『馬鳴菩薩伝』のうち、馬鳴が煩雑で煩わしい記述を省いた簡略な論を著したと記されていることから、『起信論』の作者は、こうした記述を念頭に置いたうえで、文が多いのを煩わしいとする衆生のために著されたと冒頭で述べる『起信論』を馬鳴に仮託した考えられると述べている。つまり、作者自身が『起信論』成立時に仮託したとするのだ。ただ、法蔵以前の注釈が用いているテキストには、馬鳴の作であるという記述がないため、この点についてさらなる検討が必要ではなからうか。

『起信論』が南朝の真諦周辺にもたらされた経緯については、現存最古の『起信論』注釈である杏雨書屋本（擬題、羽三三三V）では真諦の訳経と真諦系文献のみを利用していると池田将則が指摘していることに注目し、北

地の文献が真諦らのグループの手に渡り、その用語が真諦の訳経中で用いられた例をあげ、真諦は偽経である『仁王経』に注釈を付していることから見て、真諦が五五〇年に『起信論』の注釈を作ったという伝承も事実である可能性があるとする。『起信論』が真諦訳とされるようになったのは、この点もあるとするのだ。典拠をあげつつきわめて詳細な検討を加えていたそれ以前の章に比べ、この第四章の記述ははなはだ簡略となっている。議論の多くは納得しうるものだが、細かな点については、多少の異論が出ることも考えられよう。

最後の「結論」では、大竹は、如来蔵思想を集成した『宝性論』のような瑜伽師系の如来蔵思想と、如来蔵と阿梨耶識を結びつけて独自の主張を展開した『入楞伽経』のような瑜伽師系の如来蔵思想は、インドについては別な系統において成立したことに注意する。そして、この二つを結びつけた『起信論』は、勒那摩提が『宝性論』を漢訳し、同じ時期に同じ洛陽の地で菩提流支が『入楞伽経』を漢訳した中国北地においてこそ成立しえた」と論じている。大竹は、鳩摩羅什訳の『成実論』も玄奘訳『成唯識論』も、純粹な翻訳でなく、インドの仏教文献を中国人向けに編集したものであることに注意をうながす。外来文化は現地化し、新たに豊かな文化を生んでいくものである以上、『起信論』がインド成立でないとい

いっても、偽物だから価値がないと見るのは誤りであることを強調するのだ。これは、インドにおける釈尊の直説でないアビダルマ文献の展開、大乘経典の展開をどう評価するかという点と連動する問題だ。

以上だ。本書がいかにか画期的であるか、いかに多くの難問を解決しているかは明らかだろう。むしろ、本書に問題となる点が全くないわけではない。たとえば、『起信論』の「我已総説（我すでに総説す）」を、「わたしによってまとめて説かれ終わった」（三四一頁）と訳している箇所もその一つだ。漢文原文は能動態である以上、これを受け身の形で訳すのはおかしい。大竹は『起信論』を読む際、背景となったインドの経論のその箇所はどのような梵文、あるいはどのようなチベット語訳になっているかを考えながら読むらしたため、『起信論』の右の箇所についても、「〜と如来によって説かれた」といったサンスクリット経典の慣用語法に従って訳してしまっただろう。梵文文献に習熟している大竹ならではの不適切な訳と言えるが、そうした箇所はいくつか見受けられる。だが、漢文文献である以上、作者はどのような意図で書いたかという点と同時に、当時の僧侶が読んだらどのように受け取ったかを考慮しながら訳していくべきではなかるうか。また論証面でも、ここでは取り上げないが、やや武断すぎるように思われる記述が散見される。

だが、本書と『起信論』について、今後どのような議論が展開されるとしても、『起信論』は六世紀中頃に中国

北地で菩提流支や勒那摩提の訳書や講義録に接していた中国僧によってまとめられたという大竹の結論が動くこととはないだろう。一四〇〇年以上続いていた『起信論』成立をめぐる論義は、本書によってようやく解決されたと言つてよい。大竹が『起信論』に関わる近年の二大成果と称する漢文仏教文献の電子化と地論宗文献の翻刻という事業に関わった者たちの一人として、また、大竹の大学院時代以来、そのすさまじい研究ぶりを遠くから見てきた研究仲間の一人として、この画期的な学問成果の刊行を喜びたい。そして、日本史学における邪馬台国論争にも匹敵するような『起信論』真偽論争という仏教学の大問題が、こうしてあざやかに解決されることを目撃することのできた好運に感謝したい。

(1) 石井公成「近代の日本・中国・韓国における『大乘起信論』の研究動向」（『禅学研究』特別号、二〇〇五年七月）。これを増補した講演は、同「近代日本における『大乘起信論』の受容」（アジア仏教文化研究センター「2012年全体研究会プロセス・ディングス」、二〇一三年三月）。

(2) 青木隆・方広鎔・池田将則・石井公成・山口弘江『蔵外地論宗文献集成』（CIR、ソウル、二〇一二年）、青木隆・荒牧典俊・池田将則・金天鶴・山口弘江・李相昱『蔵外地

論宗文献集成 続集』(C I R、ソウル、二〇一三年)。

(3) 船山徹『梵網經の研究―最古の形と発展の歴史』(臨川書店、二〇一七年)。

(4) 石井公成『大乘起信論』の成立―文体の問題および『法集経』との類似を中心として―(研究代表者・井上克人『大乘起信論』と法蔵教学の実証的研究)平成十三年〜平成十五年度科学研究費補助金研究成果報告書、課題番号・13410006)

(5) 池田将則『杏雨書屋本『大乘起信論』と曇延『大乘起信論義疏』』(近藤大学仏教文化研究所編『敦煌写本『大乘起信論』義疏の研究』(国書刊行会、二〇一七)。

大竹晋『大乘起信論成立問題の研究―『大乘起信論』は漢文仏教文献からのパッチワーク―』(国書刊行会、二〇一七年十一月、五八四頁、一四〇四〇円)。

ISBN 978-4-336-06187-4

〈キーワード〉 真諦三蔵、菩提流支、偽経、馬鳴

【書評】大竹晋『大乘起信論成立問題の研究』(石井)